

## アメリカの宗教、アメリカの仏教

ロバート F. ローズ

こんにちは。今日の仏教学会新入会員歓迎会とは、大谷大学の仏教学会が主催の講演会ですが、この学会は大谷大学の仏教学科に所属しているすべての学生・大学院生・教員、さらには学会の趣旨に賛同してくれた方々によって組織されている学会です。したがって皆さんは仏教学科に入学されたと同時に仏教学会の会員になりました。私は今年仏教学科の主任を務めているロバート・ローズと言いますけれども、学科主任が学会の会長を務めることが恒例となっていますので、今日は仏教学会の会長として皆さんを歓迎するため、このような講演を行うことになりました。

講演に入る前に仏教学会の活動について簡単に紹介しておきたいと思います。私たちの学会はいくつかの行っています。その一つが『仏教学セミナー』という学会誌の発行です。おかげさまで去年、『仏教学セミナー』第一〇〇号を発行することができました。『仏教学セミナー』は年二回発行されていますから、この学会は五十年間続いていることになりました。さらに毎年十二月には学外から著名な先生をお招きして公開講演会を行っています。また毎年秋になりますと、普段あまり行くことのない寺院や博物館、仏教にまつわる旧跡や史跡などを巡るバス旅行を行っています。このバス旅行は友達を作るための絶好の機会ですので、ぜひ参加していただければと思います。とにか

く、皆さんに力を貸していただいて、仏教学会の活動をもり挙げていただいて、お互いに楽しく仏教について学んでいきたいと思っています。

## 一 アメリカの宗教事情

仏教学会の紹介はこれくらいにしておいて、今日は一時間ほどの時間をいただいて、「アメリカの宗教、アメリカの仏教」という題でお話しをさせていただきます。このようなタイトルを挙げさせていただいたのは一つ理由があります。ご存じのように、仏教は二千五百年前くらいにインドで起こった宗教ですが、それはインドだけに留まらず、アジア全域に広まってきました。発祥の地からスリランカや東南アジアへ、あるいは中央アジアを通して東アジアへ、さらにはチベットなどへと広まっていったわけです。しかし、現在仏教はアジアを超えて北米やヨーロッパでも広まっています。私は今年の三月にハンガリーの大学で集中講義を行いました。ハンガリーの首都であるブダペストには仏教の僧侶が教員を務める仏教の大学があることを知りました。またブダペストの郊外にはチベット仏教の寺院もあつたりしました。これは単に一例に過ぎませんが、これからも分かりますように、もう仏教はアジアの宗教ではなく、世界の宗教になっているわけです。

当然のことながら、仏教はアメリカでも広まっています。私はアメリカ人ですので、アメリカの仏教について関心を持ち、少し調べて論文も書いたことがあります。そこで、今日は皆さんがあまり知らないであろうアメリカの仏教について簡単に紹介しておきたいと思い、「アメリカの宗教、アメリカの仏教」という題をあげさせていただいた次第です。この講演を通してアメリカの宗教やアメリカの仏教に関心を持っていただければ非常にありがたいと思います。

まず、アメリカの仏教について話す前にアメリカ人の宗教意識ということについて少し紹介しておきたいと思いま

す。それはアメリカという国は宗教—宗教といってもキリスト教が主ですが—に対しても非常に熱心な国だからです。そのような敬虔深い宗教的精神風土があつて、そのうえで仏教が広まっている分けですので、まずはアメリカ人の宗教観を少し見ていきたいと思います。

そこで、最初にアメリカ人の宗教意識について考えてみたいと思います。アメリカにはPew Forumという、ワシントンに本部を置くシンクタンクがありますが、そこで様々な世論調査を行い統計を取っています。このPew Forumが二〇〇七年に大規模なアメリカ人の宗教意識に関する調査を行いました。約三万五千人からアンケートを取りましたので、この調査はかなり大規模なものでした。この世論調査の結果、興味深いことがいくつか見えてきました。そのアンケート項目から四項目ほど紹介しておきますと、そのなかには例えば「あなたは宗教を大切に思いますが」という質問があります。そしてこの質問に対して、五十六パーセントの人が「宗教は大切だ」と回答しています。また、それに類似した質問ですけれども、「あなたは神、あるいは普遍的精神を信じますか」という質問には、なんと七十一パーセントの人が「信じている」と回答しています。ここでいう「普遍的精神」は universal spirit の訳ですが、それは宗教的力を意味していると考えられます。とにかく、アメリカ人の七十一パーセントは、「universal spirit」を信じているか」という問いに肯定的に答えていることになりました。みなさんはこの数字を見てどう思いますか。わたしは驚くべき高い数字だと思います。

では次に、このような考えに基づいて、実際に宗教的行為を行っているかどうかを聞いたアンケート項目があります。それは「毎週教会に出席していますか」というものです。この問いに対して、なんと三十九パーセントの人が「毎週教会に行っている」と答えています。これもある意味では非常に驚かされる数字で、十人の内四人は毎週教会に行っていることになるわけです。少し余談になりますが、アメリカにはギャラップ社という有名な世論調査を行う会社がありますが、この会社の行つてゐるGallup Pollという世論調査が、戦後すぐから毎週アメリカ人の教会

出席率を調査しています。その結果、世論調査を取は始めた戦後まもなくから今日にいたるまで、ずっとほぼ四割の人―具体的に言うと三十五パーセントから四十パーセントの人―が毎週教会に行っていると答えています。戦争が起るとこの数字は少し上がりますが、平均して四割の人がアメリカでは教会に毎週行っているという、意味深い調査結果が出ています。また Pew Forum の世論調査では「毎日お祈りをしますか」というアンケート項目もありましたが、これに対しては約六割の人が「する」と答えています。

このような調査からも分かりますように、アメリカは宗教に対して極めて熱心な国であると言えるでしょう。そこでヨーロッパはどうかということについて考えてみたいと思います。先に挙げたギャラップ社はヨーロッパの人々の宗教意識も調査していますが、少し古い数字ですが、二〇〇七年から二〇〇八年にかけての調査結果の数字がネットで公表されています。それによりますと、ヨーロッパで「宗教は大切ですか」というアンケート調査を行ったとき、「大切だ」と答えた人はイタリアでは七十一パーセント、ドイツでは四十・五パーセント、フランスでは二十九・五パーセント、イギリスでは二十六・五パーセント、スウェーデンでは十六・五パーセントという結果が出ています。アメリカとは随分違うことはおわかりでしょう。イタリアは勿論、ローマの真ん中にバチカン市国があって、カトリックが盛んでありますので、高い数字があっても不思議はありませんが、プロテスタント発祥の地のドイツでも四十パーセント、スウェーデンになるともっと低い数字が出ています。また「毎週教会に出席していますか」という問いに対して―これも少し古い数字で十年ほど前のものですが―Gallup Poll によると、イタリアでは三十一パーセント、フランスでは十二パーセント、英国では十二パーセント、スウェーデンでは五パーセントが、「毎週出席する」と答えています。これは十年前前の数字ですけれど、今やもつと低くなっていると思われれます。

実際に私も年に一回くらいヨーロッパに出張で行きますけれども、日曜日になるとよく教会に行きます。しかし多くの場合、教会にはほんの数人しか参拝にきていません。ハンガリーのように比較的最近になって社会主義から資本

主義に変わった国では、教会には割合多くの信者が見られますが、ドイツなどの教会ではあまり多くの人は集まっています。一度スイスのローザンヌという町で学会があつたとき、日曜日には街の中心にある大聖堂に行きました。そこはとても立派な教会で、信者の座る椅子は数百ほどあつたんですが、何と、五・六人しかお参りにきていなかったんです。もちろん、これは私がたまたま見た風景で、ヨーロッパがすべてそうだとはいえないかもしれませんが、ヨーロッパにはたくさんさんの立派な教会がありますが、教会にくる信者はかなり少ないというのが、私の実感です。ですから、アメリカの状況とはかなり違うという感じがします。逆に言うと、それだけアメリカはまだ宗教を大切にしている国であるということが言えると思います。

では、アメリカではどんな宗教が信仰されているか、少し見ていきたいと思います。ここでもまた二〇〇七年の Pew Forum の調査結果を挙げておきたいと思います。それを見ますと、キリスト教のプロテスタントの教会に所属している人たちが四十四・四パーセント、カトリックが二十三パーセントいます。この二つ合わせると六十七・三パーセントですから、ほぼ七割のアメリカ人がキリスト教に属しているという状況です。それ以外の宗教は、信者の数が急激に減り、例えばユダヤ教の人たちは一・七パーセントです。以前はアメリカの三大宗教といえればプロテスタントとカトリックとユダヤ教でしたが、ユダヤ教の信者はとても少ないことが分かります。その代わりにモルモン教徒が増え、ユダヤ教と同じく一・七パーセントです。それ以外の宗教はすべて一パーセントを切る状況です。仏教が〇・七パーセント、イスラムが〇・六、ヒンズー教が〇・四となっています。そして面白いことに無宗教であると答えた人が十六パーセントいます。このように、アメリカの宗教の内訳を見るとキリスト教が非常に勢力を持っています。アメリカはまだまだキリスト教大国といっているのですが、それ以外の宗教もたくさんあるという状況です。そのなかで、仏教を信じる人は〇・七パーセントしかいませんから、超マイノリティーの宗教と言っているとは思いますが、数字とは裏腹に、仏教は特にアメリカの知識人のあいだで非常に強い影響力を持っていることも注意しなければなり

ません。ですから仏教は数字に比べるとかなり影響力の強い宗教ということが言えると思います。

## 二 アメリカの「移民仏教」

以上、アメリカの宗教事情について紹介してきましたが、ここから「アメリカの仏教」についてお話ししてゆこうと思います。そこで、アメリカの仏教と言うと、大きく分けて「移民仏教」と「改宗仏教」に分けることができると思います。最初に移民についてですが、皆さんもよくご存知の通り、アメリカは移民の国です。世界中からたくさんの人々がアメリカにやってきて、アメリカという国を作り上げたという歴史がありますけれども、それぞれの国や地域から来た人たちが、自分たちの地域・国の宗教をアメリカに持ってきている分けです。そのため多くの宗教が移民と一緒にアメリカにやってきています。このように考えてみますと、プロテスタントもカトリックも元々は移民の宗教であるのですが、ここでいう移民宗教は、一応ヨーロッパ以外からきた宗教と考えておきます。それでよく言われていることですけれども、世界の宗教の中でアメリカに進出していないものはない、それほど多くの世界の宗教がアメリカに存在していると言われています。勿論、アジアからもたくさんの移民がアメリカにやってきています、それに伴って仏教もアメリカに入ってきています。そしてアジアの様々な国の仏教がアメリカにきています。例えば、一番大きいのは多分日系の人々がもたらした仏教です。そのなかには浄土真宗もありますし、禅宗も真言宗も、そして創価学会も挙げることができます。日本の新興宗教もたくさんアメリカに入ってきています。それに加えて中国系の仏教やチベット仏教もあります。チベット仏教はダライ・ラマの影響もあり、アメリカではとても人気があり、多くの信者を獲得しています。さらにはベトナム系、韓国系、スリランカからの仏教、タイの仏教、ミャンマーの仏教などもあります。特にミャンマーではヴィパシヤナー (vipassana) とこう瞑想法がありまして、それが現在アメリカではとてもポピュラーになっています。

ところで、アメリカで最初にできた移民系仏教のお寺は、一八五三年にハワイで建てられた中国系の仏教寺院です。これが多分、アメリカで一番古いお寺ということになります。日系アメリカ人のお寺よりも早いです。これは何故かというところ、世界史を受けた方はよく知っていると思いますが、一八四八年にカリフォルニアで金が発見されました。いわゆるゴールドラッシュです。そのゴールドラッシュに触発されて一攫千金を夢見て多くの人々が中国からアメリカを目指して太平洋を越えてやってきました。その後、一八五〇年代の始めにアメリカで大陸横断鉄道を作ろうという計画がもちあがりまして、東はセントルイスから、西はサンフランシスコから、お互いに競争しあつて西と東から鉄道を作り始めました。このとき、サンフランシスコから作つた鉄道には多くの中国の移民が参加しました。このようにたくさんの方の移民が中国からアメリカにやってきました。もちろん、その頃ハワイはアメリカの一部ではなく、独立した王国でしたが、アメリカに渡る途中にあつたので、当然そこにも中国の移民が暮らすようになりました。そのような人たちの間から自分たちの伝統的な宗教を信仰したいという要請が自然に湧きあがり、中国系のお寺ができました。

ハワイやアメリカ本土でも、日系の人々が建てたお寺が多くありますが、この日系のお寺も同じように、日系移民の要請を受けて建てられました。そのことを少しお話しますと、一八九九年に西本願寺からサンフランシスコへ二人の僧侶が派遣されて、サンフランシスコにお寺を建てました。これがアメリカ本土での最初の仏教寺院と言われています。関心のある方は、阿満道尋先生の *Immigrants to the Pure Land* (『浄土への移民』、二〇一) という本を読んでもみてください。この本はアメリカにおける浄土真宗の歴史を取り上げたもので、とても面白いものです。ちなみに、阿満先生は本学の仏教学科で修士号を取得されていますので、みなさんの先輩でもあります。

これがサンフランシスコでの最初の日系のお寺ですが、それ以前にもハワイに多くの日本人が渡っています。ご存知の方も多いと思いますが、すでに明治元年(一八六八)には、サトウキビの農園で働くために日本からの官約移民

がハワイに渡っています。彼らは「元年者」と呼ばれています。それ以降、多くの日本人がハワイで働くために海を渡りました。そして、そのような人々の宗教的・精神的ケアをするために、日本から開教師も送られお寺が作られるようになりました。現在ハワイには東西両本願寺、浄土宗、臨済宗、曹洞宗、日蓮宗、真言宗、天台宗など、日本の主な仏教の宗派がお寺を持っています。

ところで、ハワイの日系移民のあいだで最初に布教活動を行ったのは曜日蒼竜かがひそくりゅうという西本願寺の僧でした。彼は日系移民も宗教的・精神的ケアが必要だと考え、公式には西本願寺からの派遣という形は取りませんでした。一八八九年にハワイに渡り（その当時ハワイはまだ独立した王国でしたが）、ハワイ島のヒロという町でお寺を立てました。しかし、キリスト教の影響の強いハワイで布教するには、方便として阿弥陀仏をキリスト教の神になぞらえて布教活動するのが得策であると論じたため、激しい批判にさらされ、それ以降ハワイの布教を断念せざるを得ませんでした。その後、一八九七年から西本願寺は移民の要請を受けて、公式にハワイに開教師を送るようになりました。そのなかでも特に今村恵猛（一八六七～一九三二）という人は重要な人でした。今村については、守屋友江先生が『アメリカ仏教の誕生』（二〇〇二）のなかで詳しく紹介されていますので、それを参照してください。

また東本願寺もハワイで開教を行ってきました。最初、東本願寺はオアフ島ではなく、カウアイ島のワイメアというところにお寺を建てました。これは一八九九のことです。その後、一九十六にはホノルルにもお寺を建てるようになり、今日に続いています。実は私の先輩が以前東本願寺のハワイ別院で開教師をしていました。彼は別院の敷地内（正確に言うとは本堂の地下でしたが）に家族と住んでいましたが、そこに教日間、泊まらせていただいたことがあります。その時のことは、今でもとても懐かしく覚えています。

話を「改宗仏教」に移すまえに、ハワイの仏教寺院の写真をいくつか紹介しておきたいと思います。最初のお寺は、移民たちが住んでいたバンガローとほとんど見分けがつかないような粗末なものでした。写真①は、一九二二に東本



※リポジトリ非公開

写真① モイリリ布教所

※リポジトリ非公開

写真② ホノルル布教所

※リポジトリ非公開

写真③ パロロ本願寺

※リポジトリ非公開

写真④ パロロ本願寺内部

出典：写真①・写真② Sixty-seven Year's History of the Higashi Honganji Mission of Hawaii より  
写真③・写真④ 25th Anniversary Celebration Palolo Honganji より

願寺が購入してお寺に改修したモイリリ布教所です。しかし徐々に立派なお寺が建てられるようになりました。写真②は、同じく一九二二に東本願寺が建てたホノルル布教所ですが、モイリリ布教所と比べると、とても立派な建物になっています。多くの場合、ハワイのお寺は伝統的な日本のお寺をまねて建てられました。インド風のお寺も建てられるようになりました。この様子を最初に取り入れたのが、本派（西本願寺）の別院ですが、これは一九一八に別院を建てたとき、今村恵猛がこのようなデザインを採用したようです。東本願寺のパロロ本願寺も同じようなインド風の教会です（写真③）。そして、これがハワイ（あるいは北米）のお寺の特徴の一つですが、その中は、日本のお寺とは違い、畳敷きではなく、キリスト教の教会と同じように信徒席（pew）とて長い木製のベンチが並ん

でいます(写真④)。またキリスト教の教会と同じように、日曜日にサービス (service、これはお勤めのことです)が行われることも大きな特徴といえるでしょう。ちなみに、ハワイ大学で仏教を教えているジョージ・タナベとウィラ・タナベ教授夫妻がハワイの仏教寺院建築を紹介した『Japanese Buddhist Temples of Hawaii』(『ハワイの日系仏教寺院』、ハワイ大学出版会、二〇一三)という本を出版されています。写真満載の楽しい本なので、関心のある方は見てみてください。

### 三 アメリカの「改宗仏教」

これまでアメリカのいわゆる移民仏教について少しお話してきましたが、次に「改宗仏教」について話を進めさせていただきます。改宗仏教という言葉はあまり聞きなれない言葉だと思いますが、これは英語の Convert Buddhism の訳語です。一言で言うとなアメリカの白人の仏教のことです。つまり伝統的なキリスト教やユダヤ教に不満を持ち、そのため仏教に新しい生き方を求めて、仏教に改宗した人々の仏教を示す言葉です。そこでアメリカの白人の間でどうやって仏教が広まっていったのかということをし見ていきたいと思います。

その歴史の中で特に注目されるのが超絶主義 (英語では Transcendentalism) という文芸運動です。この Transcendentalism とは一八三〇年代から一八四〇年代に強い影響力を持った文芸運動ですけれども、ニューヨークランドを中心としたところに発達しました。ニューヨークランドというと、ニューヨークよりも東の方、ボストンとその郊外を中心としたところです。その文芸運動の中で中心的役割を果たしたのが R. W. エマソンやヘンリー・ソロという人たちでした。Transcendentalism が流行した時代には、東洋に関心を持つ人たちが多くいました。エマソンもソロも同様に東洋の思想や宗教に大きな関心を持っていました。そのため、Transcendentalism の作家たちの作品にはヒンズー教や仏教の影響が濃厚に表れていると言われています。ですから、この時代からつまり一八三〇年代から一八四〇

## ※リポジトリ非公開

写真⑤ 鈴木大拙とビアトリス婦人

出典：Sixty-seven Year's History of the Higashi Honganji Mission of Hawaii より

年代から―仏教がアメリカの人々の関心を引くようになったと言われていきます。

そして、もう一つアメリカでの仏教の発展で注目すべきことがあります。これが一八九三年に開催されたシカゴの世界宗教会議 (World's Parliament of Religions) です。この年、コロンブスがアメリカ大陸を発見してから四百年たったことを記念して、シカゴで万国博覧会が開かれましたが、その一環として、この世界宗教会議が開催されました。そこには、キリスト教や西洋の諸宗教・イスラムだけではなく、東洋の宗教を代表する人たちが多く

参加しました。当然、仏教の代表者もそこに参加しました。この会議はアメリカの宗教史の中で非常に大きな出来事であって、初めてアジアの宗教の人たちがアメリカに来て、自らの意見を述べて、キリスト教をはじめアメリカの既存の宗教の人々と対話を行ったことで、画期的な会議でした。この会議に出席した仏教者の中には例えばアナガリカ・ダルマパーラという人もいました。ダルマパーラはあまり日本では有名ではありませんが、スリランカの仏教の近代化に非常に大きく貢献した人です。そして、日本からは何人かの僧侶が出席していますが、その中で注目したいのが釈宗演という禅宗の僧侶です。釈宗演は鎌倉の円覚寺の僧侶ですが、その人がこの会議で講演を行っています。実は釈宗演がシカゴに行ったことは非常に大きな意義があります。それは、釈宗演が日本に帰ったあと、ポール・ケーラスという人が、仏教の書物を英訳したいから、ぜひその仕事のアシスタントを日本からアメリカに派遣してもらいたいと申し出て、その要請を受けて釈宗演がアメリカに派遣したのが鈴木大拙だったからです (写真⑤)。

皆さんは鈴木大拙のことを知っていますか。鈴木大拙は簡単に言うと、「禅」という言葉を英語にした人です。皆

さんは「禅」は英語だということを知っていましたか。当然、禅は日本語の言葉ですが、英語の辞典を引いてみると、ちゃんと zen という言葉が載っている分けです。つまり、英語の辞書にちゃんと載っているので、zen は紛れもなく英語の言葉である分けです。

とにかく、鈴木大拙とはどのような人かと言うと、「禅」という言葉をアメリカの辞書に載せた人だといっていると思います。もう少しその背景を詳しく説明しますと、先ほど言いましたように、大拙はケーラスの要請を受けて釈宗演がアメリカに派遣した人です。大拙は金沢出身の人ですが、そのころ東京帝国大学で学んでいました。しかし、あまり大学には行かず、釈宗演のもとで坐禅の修行に励んでいたんです。大拙は英語が良くでき、釈宗演がシカゴで行った講演を英訳した人でもあったので、そんなご縁でアメリカに行くことになったようです。アメリカではケーラスの助手をしながら十年間くらい過しました。その結果、とても英語が堪能になるわけです。そしてアメリカ人のピアトリスという女性と結婚しました。また日本に帰ってきたからは学習院の教授になり、英語を教えていたんですが、大谷大学の第三代学長の佐々木月樵先生に招かれて、京都に移り大谷大学で宗教学を教えるようになりました。(ちなみに、奥さんのピアトリスさんは英語の先生になったそうです。)そして、授業を行うとともに、当時あまり欧米ではよく理解されていなかった大乘仏教について紹介するための『ザ・イースタン・ブッディスト』(The Eastern Buddhist) という学術雑誌を発行するために、今も学内にある東方仏教徒教会 (The Eastern Buddhist Society) を結成しました。同時に仏教―特に禅―を紹介する本を一九二〇年代くらいから次々と出版して行きました。それらの本を読んで仏教に関心を持った人たちは欧米にはたくさんいます。実は私もその一人なんです。とにかく、大拙がいなかったら多分アメリカでは仏教は広まらなかっただろうと思います。晩年になりますと、大拙はコロンビア大学などのアメリカの大学の客員教授として、長年のあいだ仏教について教えました。そしてその講義を受けた人たちも仏教について深い関心を持つようになったわけです。その影響もあって、いわゆる「禅ブーム」がアメリカで起り、

特にアメリカの知識人を中心に禅が大流行しました。そして仏教と言えば禅、禅イコール仏教と受け取られるようになり、アメリカ中に広まりました。

これがアメリカの白人社会に仏教が広まる一つの大きなきっかけになったんですが、この禅ブームに関連した一つの現象として、ビート・ジェネレーション (Beat Generation) と言われる、禅に影響された文学運動が起こります。この文学運動は一九五〇年代の後半から一九六〇年代の前半にかけてサンフランシスコを中心に発展した文学運動ですが、その運動の代表的な人物を三人ほど挙げておきます。まずはジャック・ケルアック (Jack Kerouac, 1922-1969) という小説家があります。彼の代表作は『オン・ザ・ロード』(On the Road, 1957) という小説ですが、これはニューヨークから西海岸までヒッチハイクしたときの体験を小説化した作品です。また『ザ・ダルマ・バムズ』(The Dharma Bums, 1957) という、禅をより直接的な形で取り上げた小説もあります。二人目はアラン・ギンズバーグという詩人です。そして最後にゲイリー・スナイダー (Gary Snyder, 1930-) という詩人ですが、彼はとても日本通の人で、一九五〇年代から六〇年代くらいにかけて、大徳寺の塔頭で禅の書物を英訳するというプロジェクトに参加したこともあつた人です。またスナイダーは中国の唐時代に活躍した禅の詩人である寒山の詩も英訳しています。これらの人たちは皆、様々な形で禅に影響されたわけですが、アメリカにおける仏教の広がりを示す例として挙げる事ができます。

次にアメリカにおける禅への関心の広がりについて見ていきたいと思います。ここで禅に対する関心の広がりを具体的に示す例として、アメリカにおける禅センター (禅の道場) の数を見ていきたいと思います。例えば、ある資料によりますと、一九〇〇年から一九六四年までの間には全米に二十一箇所の禅センターがありました。一九六四年から一九七四年のあいだに、その数は五倍に膨れ上がりました。これはちょうど禅ブームに当たる時代ですが、この時代には百箇所の禅センターが存在するようになったんです。そして、その次の十年のあいだつまり一九七五年から一九八五年のあいだに―その数はまた倍増し、そして、その次の十年のあいだには、さらにまた倍になっています。

このようにアメリカの禅センターの数は一九六〇年代から急激に増加していることが分かります。一九七〇年には千箇所近くの仏教関係施設がアメリカにあったことになるわけです。特に一九七五年から一九八五年のころにはベトナム戦争が起り、その影響もあって、たくさんアメリカの若者がアジアに関心を持ち、アジア各地にバックパックを背負って旅行しましたが、そこで直接仏教に触れて、アメリカに帰ってから本格的に仏教を学び実践する人たちが多く現れました。そのため、仏教はアメリカ社会に浸透していきました。先日ネットで調べたところ、現在アメリカには二千四百五十一箇所の仏教団体の名前と住所が挙がっていました。これかも分かりますように、アメリカではどんどん仏教が広まっていると云えます。

#### 四 アメリカ仏教の特徴

時間があまり残っておりませんので、最後に簡単に現在のアメリカ仏教の特徴について話させていただきます。ここで大きなポイントとなるのは、仏教はアメリカの精神風土にに応じて変化してきている、ということです。実は、これは仏教の長い歴史のなか、常にそうだったんです。ご存じのように仏教はインドで生まれ、中国に伝わりましたが、中国に伝わった仏教は中国文化に強く影響され、中国独自の仏教に変化していきました。もちろん仏教は中国の文化や精神風土に大きな影響を与えましたが、中国の文化に影響を受け、新しい中国化された仏教が誕生したことは間違えありません。また仏教が中国から日本へ伝えられたとき、日本の風土に合ったような形で新しい形の仏教が生まれました。このように仏教は常に、伝わった土地で新しい形を取ることで発展していったと言えます。同様に、近年になってアメリカや欧米に伝わった仏教も、その新しい環境に応じた形で徐々に変化し発展しているわけです。

そこで、アメリカの仏教の特徴を四点ほど挙げておきました。これらの点はアメリカのチャールズ・プレビッシン (Charles Prebish) とごう先生が一九九九年に出版された *Luminous Passage: The Practice and Study of Bud-*

*dhism in America* という本のなかで挙げているものです。この本はアメリカ仏教の研究に関する初期のものの一つですが、なかなかいい本だと思います。とにかく、プレビッシュ先生によると、アメリカ仏教にはいくつかの特徴がありますが、このなかから四点ほど取り上げてみたいと思います。

まず最初に、プレビッシュ先生によると、アメリカ仏教の大きな特徴は、それが実践重視であることにありとされています。具体的に言うと、メデイテーション（瞑想・禅）を重視するところにアメリカ仏教の一つの大きな特徴があるとされています。日本の仏教はよく「葬式仏教」と批判されますが、必ずしも禅を中心しているとは言いわけですけれども、アメリカでは仏教といえばメデイテーション、仏教イコールメデイテーションという形で理解されています。「あなたは仏教徒なのにどうしてメデイテーションしないの」というふうによく言われます。このように、実践を重んじるというのがアメリカ仏教の一つの大きな特徴と思います。

二つ目に、在家主義ということが挙げられます。皆さんはこの点をあまり不思議には思わないかもしれませんが、日本以外のアジア諸国では仏教といえば出家教団のことをいいます。出家している僧侶・尼僧が仏教の中心になるわけです。ですから、台湾や中国やベトナムに行きますと、仏教者とは、基本的には頭を剃り法衣を着て、結婚しないで、肉も食わずお酒も飲まないで、戒律を厳格に守って世俗から離れて寺院で生活する僧侶・尼僧のことを意味します。これが日本以外のアジア諸国の仏教の基本です。しかし、日本ではお坊さんは通常一般の人々とはあまり変わらない生活をして、お酒も飲めばお肉も食べ、結婚もします。これが実はアジアの他の国々には見られない日本仏教の特徴なのです。しかし、興味深いことに、アメリカではむしろ在家仏教が中心です。先ほど言いましたように、アメリカに仏教が広がった時期は日本の禅の影響がとて強かったもので、日本的な在家仏教が定着したと考えられます。一般的にアメリカの仏教信者は出家せず、結婚して子供も産んで、普通に社会に行って仕事をして、仕事が終わった後に、あるいは週末にお寺に集い、そこでメデイテーションをします。これがアメリカ仏教の特徴の一つで

す。最近ではアメリカでも出家者の教団も増えてきていますが、まだ主流とは言えないように思います。

三番目の特徴として、民主主義的傾向を挙げることができます。アジアの仏教教団は概ね上下関係が厳しいですけれども、アメリカではそれほど厳しくはありません。それに加えて、アメリカ仏教で特に注目すべき点は平等主義です。つまりジェンダーフリーといえますか、男女平等主義ということも挙げられます。ですから、アメリカの禅宗の教団でも女性がリーダーであることもあります。これが一つのポイントですね。

そして最後に、これがもしかしたら最大の特徴になるかもしれません。エンゲイジド・ブディズムの傾向が強いことが挙げられます。これがアメリカの仏教の一つの大きな特徴です。エンゲイジド・ブディズムという言葉は、日本では最近になってようやく知られるようになってきたという印象がありますが、このエンゲイジド・ブディズムとは文字通り訳しますと「社会に関わる仏教」ということです。時には「社会参加型仏教」、あるいは「社会を作る仏教」と訳されていますけれども、私なりに一言で定義してみますと「社会の様々な問題に積極的に関わることによつて自らの信仰を深めていこうとする仏教」といえると思います。つまり社会の様々な問題に積極的に関わる仏教ということです。勿論、仏教は昔から社会問題に関わってきましたし、明治以降、日本でも仏教は社会福祉とか教育とか医療とか、色々な分野で社会の問題と積極的に関わってきましたけれども、エンゲイジド・ブディズムはそのような社会福祉的なものに限らず、反戦運動とか、環境問題とか、反原発運動とか、政治色の濃い様々な社会問題に積極的に関わろうとするところに大きな特徴があるように思います。日本では経済格差の問題とか、ホームレスの問題とか、いじめの問題とか、そういうような社会問題に積極的に関わっていこうという仏教を意味すると思います。

そもそもエンゲイジド・ブディズムはベトナムのティク・ナットハンという僧侶が提唱したもので、アジア諸国には興味深い事例が多くありますが、そろそろ時間も無くなってきましたので、最後にこのエンゲイジド・ブディズムの一例としてアメリカのエンゲイジド・ブディズムを代表する人物としてバーナード・グラスマン (Bernard Glass-



man)を紹介していきたいと思います。グラスマンは一九三九年にニューヨークのブルックリンで生まれ、二〇〇二年に亡くなった人です。彼の両親はユダヤ系のアメリカ人で、社会的意識が強く、様々な社会問題に積極的に関わっていたようです。グラスマンさんは後にニューヨークを離れて、ロサンゼルスに移り住みましたが、ここでは有名な飛行機会社のマクドネル・ダグラス社に入りました。そして、飛行機会社で働くと同時に禅に関心を持ち、ロサンゼルス禅センターという、とても有名な禅センターを創立した前角博雄老師に師事し、坐禅を修業しました。

その後、グラスマンはニューヨークにもどり、そこでグレイストーン・ペーカーリーという会社を立ち上げます。これは元々お寺をニューヨークで建てる資金を稼ぐために創った会社だったんですけども、それはペーカーリーです。お菓子やケーキなどを作っている会社でした。しかし、このグレイストーン・ペーカーリーの大きな特徴は、当時アメリカではホームレスの問題がとても深刻になっていたのです、ホームレスの人々を雇い、彼らの社会復帰を後押しすることも目的として設立された会社であったことです。この会社のローガンは「We don't hire people to make brownies; we make brownies in order to hire people」〔私たちはブラウニーを作るために人を雇用するのではない、人を雇用するためにブラウニーを作るのだ〕というものです。ですからあくまでも人を助けるために会社を創ったというわけです。今やこの会社は年間六百万ドルの売り上げを誇る企業になっているということです。その後、グラスマンはグレイストーン・マンダラ (Greystone Mandala) という法人を創って、その活動の一環として、グレイストーン・ファミリー・イン (Greystone Family Inn) を創立します。これはホームレスや低所得者のために古い家を買ひ、リフォームして安い賃金、あるいは無料で貸し出すという宿泊所のことです。また、一山ハウスと言って、エイズ患者の宿泊施設も創りましたし、そしてマイトリー・センターと言って、エイズ患者の診療所、あるいはターミナルケアの施設も創っています。こういう形で次々と、禅を中心にして様々な社会問題に立ち向かっていこうというのが、グラスマンさんの考えです。

またグラスマンのユニークな取り組みとして、いわゆる street retreat を紹介しておきたいと思っています。Street retreat のいい和訳はないのですが、これを「市中摂心」といってもいいのではないかと思います。「摂心」とは禪の修行の一環で行われるものですが、特定の時間を区切って集中的に坐禅を行うことです。今日でも日本の禪宗では臘八摂心といって、十二月の一番寒い時期に一週間集中して坐禅をしています。このような摂心をグラスマンもしましたが、それをお寺で行うのではなく、街の中に出て、そしてホームレスの人々とのあいだで、つまりホームレスの人たちと一緒に生活しながら摂心をするわけです。何故そんなことをするのかというと、やはりホームレスの人たちに接することによって、人生の苦しみとか理不尽さとかを実感して、そしてそれを社会に還元するためです。つまりホームレスの人々と共に生活する中で、仏教の基本的知見である「苦」を見つめることを目的にしていると言えるでしょう。基本的には、ホームレスの支援はホームレスの人たちから学ぶべきだとグラスマンは考えているようです。つまりホームレスの人たちが抱えている問題を一番よく知っているのはホームレスの人たちですので、そういう人たちを支援するためにはそういう人たちから直接学ばないといけない、ということもあります。いずれにせよ、この street retreats はユニークでとても興味深い取り組みだと思いますので紹介させていただきます。

とても早口でまとまりのない話になり、本当に申し訳ありませんでしたが、このくらいで終わらせていただきます。長い間ご静聴ありがとうございました。

(本稿は、二〇一五年四月一六日に開催された仏教学会新入会員歓迎講演に基づく原稿である。)